

「わたしの隣人」
ルカによる福音書 10 章 25－42 節

ある律法学者がイエスさまに質問しました。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」と。イエスさまは逆に「律法には何と書いてあるか」と聞き返しました。すると律法学者は「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」と答えました。この答えを聞いたイエスさまは「正しい答えだ」と言われました。そして「それを実行しなさい」と言われました。

さらに、この律法学者は「では、わたしの隣人とはだれですか」と問います。彼は「自分を正当化しようとして」とあります。おそらく彼には、隣人を愛するという教えに対して後ろめたさがあったのでしょう。だから自己弁護しようとするのです。「わたしの隣人とはだれか」を問い、枠を設け限定することで、あの人は隣人ではない、だから愛せなくてもしょうがない、そうやって自分を正当化しようとするのです。

するとイエスさまは、たとえ話を話され「あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」と律法学者に問われました。答えは明白です。律法学者も「その人を助けた人です」と答えました。その答えを聞いて、イエスさまは言われました。「行って、あなたも同じようにしなさい。」と。

隣人を愛するとは、隣人になることだとイエスさまは言われます。そして、そのように生きて、私たちの真の隣人となってくださったお方こそ、主イエス・キリストです。私たちがこのたとえを聞くと、多くの場合、自分もサマリア人のように生きなければならないと考えるでしょう。けれども、どうしても「そうは言っても」という言い訳を抑え切ることは出来ないでしょう。

しかし、イエスさまは、ここで半殺しの目に遭って道端に捨てられていた人こそ、私たち自身であると教えられます。そして、このサマリア人はイエスさまご自身のことなのです。当時、ユダヤ人はサマリア人を嫌って敵対していました。しかし、そんなふうに敵意を持たれていたサマリア人が、傷だらけのユダヤ人を助けたのです。同様に、私たちがまだ神さまに敵対していた時、イエスさまはご自分の方から私たちを憐れに思って近づいて来てくれました。私たちの隣人になってくれて、その愛のすべてを注いでくださったのです。私たちは、この驚くべき神の愛に打たれるからこそ、神を愛するようになります。そしてまた、神を愛すればこそ、隣人を愛するのです。

では、神を愛するというのは、いったいどういうことなのでしょう。そのことが語られているのが「マルタとマリアの話」なのです。もし、善いサマリア人の話しか知らなければ、私たちの信仰は隣人を愛するという方向にぐっと傾いてしまうでしょう。そうになると、人に親切にしましょうということと、キリスト者として生きるということが、何も変わらないようなことにさえなりかねません。

さて、ベタニアという村のマルタ・マリア・ラザロという兄弟が住んでいた家にイエスさま一行が来られました。マルタはイエスさま一行を快く迎え入れました。マルタにとっ

て、イエスさまに仕え、イエスさまの必要を満たすために自分が用いられることは、何よりも大きな喜びであったに違いありません。ところが、次第にマルタの心境は変わってしまいます。最初は気にも止めていなかったのに、何もしないマリアが気になり始めたのです。そして、いつの間にか、マルタは、自分のしている奉仕を喜んでできなくなってしまいました。すると、人のことを非難するようになるのです。マルタはそのような心の乱れに陥ったのです。ときに私たちは、喜びをもって担った奉仕だったはずなのに、心を乱し、その喜びを見失って、自分だけが重荷を背負わされているように感じてしまうことがあります。ここに、良いことをしよう、人に親切にしましょうというだけではどうにもならない私たちの現実があるのです。

そのマルタに対して、イエスさまはこう言われました。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。」と。

私たちはこの世で生きていく限り、多くの思い煩いがあり、心を乱すことが山ほどあります。神さまを愛せなくなってしまうこともあります。しかし、そんな私たちをイエスさまは、名前を呼び、ご自分のもとへと招いてくださるのです。必要なことは「ただ一つ」と諭し、私たちに神の言葉を聞かせてくださるのです。

この神の言葉にこそ、私たちの命があります。この神の言葉を伝えるためにイエスさまは語られるのです。そして、神の愛を与えるために、神の救いを与えるために、神の国を与えるために、イエスさまは十字架に架かり、自らの存在をもって神の愛を表してくださったのです。このことこそが、私たちにとってどうしても必要なただ一つのもの、どうしても失ってはならないただ一つのもののなのです。

イエスさまの足もとに座り、御言葉を聞くというのは、この私のためにすべてを注いでくださっている主の御業を精一杯受け止めて、感謝するということです。

私たちを罪から救い出すために、御自分のいのちを献げてくださった。このただ一つのものを確かなものとするとき、私たちは神を愛し、その神に支えられて隣人を愛するという愛の業に励むように押し出されるのです。